



Title	さらぬ別れ 島津先生と宗因と私
Author(s)	尾崎, 千佳
Citation	語文. 2017, 108, p. 19-24
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/71005
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

さらぬ別れ 島津先生と宗因と私

尾崎千佳

平成二十年二月刊『島津忠夫著作集 第十四巻 国文学の世界』の「解説」に、次のような件がある。

おおけなくも私ごときが著作集を残すということ自体が憚られるのであるが、このような形で、著作集を編んでみて、島津忠夫という一人の国文学徒（戦中の名残だが、この「学徒」という語だけは好きで、あえて学者とは言わない）が、大正十五年（一九二六）に生まれ、昭和の戦中・戦後を生き抜き、とにかくここまで辿りついたことを、この世に残しておきたいと思ったのである。私を知らない後々の人が、少しでも気安く身近に思っていたら、これにまさる喜びはない。

期するところあつて著作集を読み返していたある夜、かつては何気なく読み飛ばしていたのであろう「私を知らない後々の人」とのひと言に胸を衝かれた。島津先生を知らない世代の存在が、これから現実になってゆく。ついに先生はお亡くなりになってし

まったのだと改めて思った。

島津先生とのさらぬ別れをひそかに恐れて過ごした十年間であった。そのきっかけになったひとつの思い出がある。平成十九年十月、早稲田大学で開催された俳文学会に参加した翌日、先生と私は、千葉県佐倉市の国立歴史民俗博物館まで足を伸ばし、水木直箭旧蔵の西山宗因筆古今和歌集の調査にあたった。時間に少しばかりの余裕ができたので、佐倉の街をぶらぶらと歩き、麻賀多神社で香取秀真の歌碑を見たあと、「玉家」という老舗の鰻屋でお昼を食べることになった。鰻を待つあいだ、先生は、ご蔵書を段階的に岐阜県郡上市に寄付するというお話を切り出され、「そろそろ考えなあかんからね」とおっしゃり、「宗因はまだ残しとくよ」と付け加えられた。「そろそろ考えなあかん」こととは、老後の始末に他ならない。観光気分には浮かれていた私は軽いシヨックを受け、「まだ早いんじゃないですか」というようなことを言ったと記憶している。先生は、そのとき、ネクタイを緩め

る手を一瞬止めて、「まだ、つて、あんだねえ、僕もう八十過ぎとんのよ」と、真剣な口調でおっしゃった。そうだった。まったくそうは見えないのでつい忘れてしまふけれど、先生はすでに八十を越えておられるのだ。私は、「玉家」の箸袋をそつと持ち帰り、その裏に「平成十九年十月十五日（月） 島津先生と歴博」と書きつけて、自宅の机の引き出しにしまった。宗因資料を探し求める先生との楽しい旅路がいつまでも続くわけではなく、残された時間には限りがあることを、この箸袋を目にするたび、肝に銘じようと思ったのである。

先生のご葬儀か偲ぶ会のような席に参列している夢を頻繁に見るようになったのは、そのころからである。泣きぬれて目覚め、夢でよかったと何度も胸をなでおろした。先生は、しかし、その同じ十年間を、ご自身がこの世を去ったあとの世界を現実のこととして見据えつつ、生きておられたのだった。

私は、大阪大学を卒業後、平成六年四月、諸先輩方のご助言もあつて武庫川女子大学大学院に進み、以来、二十二年間にわたつて、島津先生に師事してお教えを受けてきた。平成四年十一月、阪大で開催された日本近世文学会秋季大会が、先生との最初の出会いであった。その折、先生のご発表「宗因とその後の西山家」に接したことがひとつのきっかけとなつて、卒業論文に西山宗因を選んだのであつたが、宗因に惹かれたのか島津忠夫に憧れたのか、正直なところ、いまだ分明でない。

入門してまもなく、いずれ宗因全集を編みたいというお話を聞かされた。宗因の全集は、かつて野間光辰先生が企図されて推進されていたものの、果たされなかつたという。野間先生に協力した研究者も多いが、それはそれとして、もういつべん新たに計画してもよいころあいだろう、とのことで、大学院入学後の最初の面談で、手始めに『貞門談林俳人大観』から宗因の入集俳書を抽出してみるよう指示を受け、大いに張り切つた私は、数日のうちに宗因入集俳書一覽をこしらえて先生に提出してみせた。「えらい早かつたな」とちよつと驚かれた先生の顔を、いまでも鮮明に思い出すことができる。大阪天満宮御文庫の西山家旧蔵書を全部見るように言われたのも、頼原退蔵先生の「西山宗因年譜」を増補した島津先生作成の「宗因年譜稿」をお譲りくださったのも、修士課程一年目のことである。私は、それらのすべてを吸収して「西山宗因年譜稿」を編み、修士論文の副論文とした。その後、尾形仍先生が監修を、八木書店が版元をお引き受けくださることになつて、平成十三年七月、いよいよ宗因全集の編纂事業が始まつた。私が山口大学に就職して大阪を離れた年の夏のことである。

こうして振り返つてみれば、思い切つて島津先生の門を叩いた私は、研究者として何と恵まれた出発をしたのだろう。それに、まったくのかけだしの、何の業績もないころから、島津先生の教え子であるというだけで、私はいつたいどれだけの得をしてきたかわからない。島津忠夫という名前がもつ信頼は、学問的にも人

格的にも絶大であった。師をかさに着た若い私はいつも得意であったが、長ずるにつれてようやく自分の卑小を知るようになり、先生の偉大さは徐々に私を苛むようになった。苦勞して調べあげ考えた結果について、「このように考えてみたのですが」と内心に自信を含んで言うと、「うん、それでいいよ、なんで？」と、ただちに問い返されてしばしば言葉を失った。「なんで？」は、「なぜにそんなに当たり前のことをもったいつけて訊くのか」という意味である。嫌味ではない。そんなとき先生は心底怪訝そうな表情をなさっていた。私が懸命に調べ考えたことの大半は、先生にとっては当たり前なのであった。努力と研鑽を続けていれば、いつかは先生に追いつけるのではないか。私はみずからを慰めつつ歳を重ねたが、瞬時に問題を解きほぐし、あらゆるものとに然るべき位置を与える先生の頭脳の冴えは衰えることなく、私はとうとう最後までそれに追いつくことができなかつた。先生から繰り返し突きつけられた「なんで？」は、いまも耳朶に響いて去ってくれない。

あれほど恐れてきた先生とのお別れのときを、私は静かな心で受け止めた。繰り返し見た先生の死の夢は、さらぬ別れの衝撃を少しでも和らげるための、無意識のリハーサルであったのかも知れない。だが、先生の訃報に接しても心が動かなかったのは、いまは悲しんでいるときではないと思つたからでもある。後悔に浸るのはあとにしよう、いまは先生との約束を守らなければならな

いと思つたからである。

この文章は、島津先生のご逝去からおよそ一年後の平成二十九年三月に書き始めた。そして、先生の一週忌を間近に控えた平成二十九年四月十日、ようやく西山宗因全集は完結した。編集委員会の結成から数えて、実に十六年もの歳月を費やしたことになる。特に、最終二巻の編成にあたった長く苦しい後半戦のあいだ、私に加わつていなかつたならばこんなにも遅れることはなかつたに違いないと、幾度思つたか知れない。編集委員に加えていただいた当時の私は二十代の終わりで、この大ききさに対する自分の力量をはかることもできないくらいに未熟だった。その未熟さからいつまでも脱しきれず、宗因全集を大義名分として、私は、先生と確かな繋がりを保てることの愉悦と優越に溺れてきた。そうして時を失つた。過ぎ去つて二度とかえらない時間の輝きは、自分の愚かさをいやおうなく照らし出し、壁に頭をぶつけていつそ砕けてしまいたくなる。先生は私を責めることはもちろん、催促なさるようなことすらなかつたが、どれだけ宗因全集の完結を待ち望んでおられるか、思いの深さは私がいちばんよくわかつていたはずである。わかつていながら、いつたいどうしてできなかったのだろう。

平成二十六年九月、先生からお電話をいただいた。二週間ほど前に資料調査のために北陸の鶴来までご一緒したばかりだったが、その秋はさらに逸翁美術館と佐太天神宮に同道する予定があつた。

「検査にひっかかったんで、すまんけど、逸翁にはひとりで行ってくれるか。伊井君には僕から連絡しとくから」とのこと。低い声。よくない想像が頭をよぎる。数日後、再びご連絡をいただいたとき、所沢での手術を決意されたというお話のあとで、佐太には行くよ、と淡々とおっしゃられた。不安を覚えつつその日を迎えたが、大阪駅で落ちあった先生は常とかわらず快活で、そして饒舌であった。

ところで、島津先生との資料調査では、成果のいかんにかかわらず、帰路、とても誇らしい気持ちになったものだ。何しろ、先生はどこに行っても有名人であった。史料編纂所では隣席の歴史研究者たちが「ナマだ、ナマの島津忠夫だ」とささやきあつているのが漏れ聞こえてきたし（耳の遠い先生には聞こえていなかった）、柿衛文庫では島津先生に偶然邂逅したことに驚喜した女子大学院生に握手を求められるという場面も目撃した（先生は案外嬉しそうに握手に応じておられた）。和倉温泉の旅館では、私たちの歓談を襖の向こうで涙しながら盗み聞く仲居さんに驚かされたこともあった（その仲居さんは歌人ということであった）。

誇らしいのはそのようなことばかりではない。先生は、調査させていただいた資料がどのような内容で、それが文学史的にどのような意味を持つものであるか、所蔵者・管理者の方々にわかりやすく解説されたうえで、調査に応じてくださったことに対する心からのお礼の言葉を述べられた。その言葉に、誰もみな島津先生に資料を見ていただいてよかったという様子になる。私はそれ

をあたかも自分の手柄のように感じていたのだった。

それはその日も変わらなかった。私は、先生がいつもと変わらない先生であることに安堵していた。梅田の阪急三番街の「司」で晚ご飯をご馳走になったのもいつものことであった。いつものようにお酒を一合注文し、遠いところ、ご苦労さんといつものようにねぎらってくださった乾杯、そのあとしばらく間を置いて、先生は、「ああ、あと三年生きたいなあ」と絞り出すような声を出された。その思いがけぬ暗さにどきりとした。いつもの先生ではない。

私は同じ病で父を亡くしたばかりであった。しばらく気まずいやりとりを重ねたあと、やおら、先生はこれから取り組むべき研究課題についてお話しになり始めた。源氏物語の論文集のこと、紹巴の富士見道記のこと、「まだ結構やらなあかんことあるな」と微笑まれたが、それは決してその場の思いつきでなく、ここ数日のうちに考え抜かれた覚悟であることが察せられた。

先生の気力回復に少し安心した私は、「宗因全集もまだ残っていますし」と、つい口走ってしまった。先生をさらに元気づけたような、思いあがった気持ちがあったと思う。その瞬間、先生は、まるで私のその言葉を待っていたかのように即座に、そして珍しくつよい調子で、「宗因は僕がおらなつても尾崎さんやってくれるし」と、最後の「し」に力をこめるようにびしゃりとおっしゃった。宗因全集について、先生のほうから話題にされることは、その後一度もなかった。

以来、先生の無言は重く私にのしかかった。何としても間に合わせなければならぬ。これ以上ない厳格な締切が思いもよらぬかたちで提示され、さすがの私も必死になり、所沢まで厚かましくおしにかけては編集状況をご報告した。しかし、結局、完結のご報告をすることは叶わなかった。私が間に合わせられないことを、先生は、あの夜、すでに見きわめておられたのだった。

果たして追悼にふさわしい言葉が紡げるかどうか、おぼつかないままに書き綴ってきたものの、いまの私には、やはり、懺悔録しか書けなかった。いや、懺悔にもなっていない、これはつまるところ幸福の回想録でしかないのかも知れない。五十年以上にわたる研究をみずから集成すると併行して、学界を牽引する研究を新たに切り拓いてゆく、超人的なひとり「国文学徒」の姿を間近に仰ぐことのできたこの二十二年間は、私の研究人生にとつて、何ものにも代えがたい尊い時間であったのだから。

宗因は僕がおらなくても尾崎さんやってくれるし。先生は、細部に拘って前に進めない私を、いつも、そして最後まで、私が私を信じる以上に、つよく信じてくださっていた。その信頼に堪えたくて応えたくて狂おしかった。しかし、先生が信じておられたのは、何も私という個人ではなかったのだ。先生はもつと遠くの、文学と文学研究の未来を見つめておられたのだ。

『島津忠夫著作集第十四巻 国文学の世界』には、平成十七年開催「宗因から芭蕉へ」展の展覧図録の巻頭言として書かれた

「西山宗因讚」も収録されているが、先生は、著作集収録時の「付記」として、次のように書き残されている。

思えば、宗因の全集や展覧会は長い間の私の夢であった。『西山宗因全集』の内容見本の中で、尾形叡氏は、その最後を、

宗因研究の先達頼原退蔵博士は、宗因こそは、わが近世新興文学の魁をなしたものの、との位置づけのもとに「西山宗因」「西山宗因の連歌」の二篇と稿本「宗因句集」を遺し、その衣鉢を継いだ野間光辰氏もまた同題の論考ほか二篇を発表、「全集」の編纂を企図して逝かれた。本全集の刊行が、それら先人の遺志に応え、文学史と文学の大きな謎の解明に資することになればと願ってやまない。

と結ばれている。まさしく同じ思いである。

宗因全集が島津先生にとって積年の夢であったことは、『雅俗』第十四号（平成二十七年七月）掲載の「西山宗因との出会い」にもまなまましいが、私は、宗因に対する思い入れにあふれた先生の文章にずっと向きあえずにいた。宗因全集が未完に終わる可能性を危ぶみ、十分な時間を与えていただきながら先生の命のあるうちに宗因全集を完結できなかった自分を恥じていたからである。一周忌に全集最終巻を手向け、その言葉にどうか正対し得るようになつたいま、島津先生の夢が、野間先生や頼原先生の夢を継ぐものでもあったことに、深く思いを致してみる。昭和十一年六

月刊『俳諧史論考』に発表された頼原退蔵「西山宗因の連歌補考」には、「他日宗因の全集が編まれるやうな時機の到来を、切に待つものである」との一節がある。頼原先生は私にとっては見ぬ世の先達であるが、その時機の到来を、泉下の頼原先生は島津先生からすでにお聞き及びであろう。そうして、ようやく、ほんとうにようやくできあがった宗因全集も、文学と文学研究のはるかなる歴史の流れのうえでは、ひとつの通過点に過ぎないのだから。

島津先生の信じた文学と文学研究の未来に、私はいるだろうか。あるいは、文学と文学研究の未来をまっすぐに信じるつよさが私にあるだろうか。あらゆる点で私には大きすぎる師であった。さらぬ別れを経てもなお、私の心は島津忠夫を憧れてやまない。だが、どんな小さなことでもいい、私なりに先生を超え、私を超え、未来に向けて、そろそろ歩み始めなければならないと思っている。

(おどぎ・ちか 山口大学准教授)